

「内科レジデントマニュアル」 第5版

聖路加国際病院内科レジデント 編集

国立病院東京医療センター総合診療科

木 村 琢 磨

最近、誰もがインターネットで最新の医学情報を得ることができるようになり、医師には専門的な知識とともに患者の抱える問題の解決能力が求められている。しかし、研修医が臨床の場に出ると、医学生時代の単純想起型の医学知識とはかなりの乖離があり、患者を前にして何もできないことに気づかされる。それは経験の乏しい医師に問題解決型の知識が不足しているからである。

この度、医学書院より「内科レジデントマニュアル」第5版が上梓された。本書は全39章331頁の本文と医原性疾患、附録の項より成り、日常診療でしばしば遭遇する患者のプロブレムや症候に対する適切なアプローチが、まるで指導医に直接助言を受けているかのように、実践的に編集されている。そして、ベッドサイドで最も重要な重症度や緊急性の判断、何を、どれだけ、どのように、という問題解決に必要な具体的な行動目標が、経時的に簡潔明瞭に記載され、トレーニング中の医師や、プロブレムが明確でない患者を診る機会が多いプライマリ・ケア医にも極めて有用である。また知識、技能

のみならず、side memoなどで情報収集、病態生理や鑑別疾患についても言及されている。しかし、初心者にはしばしばマニュアルのみを鵜呑みにしてしまうことがあり、日ごろから成書で調べる心がけが必要である。

日常臨床は判断や決断の連続であるが、人を相手にする臨床医学では、不確実な要素やコントラバーシャルなことも多い。そこで救急の場などでは重大な誤りに陥らず、迅速、正確かつ安全を重視することが重要であるが、本書には適応や対処である“do”に加え、注意、禁忌として“don't”が詳細に記載されていて使いやすい。また副作用に対する留意や、今回より保険診療に必要な薬価も記載され、コスト意識についても配慮されている。

医学の進歩は急速で、内科学は高度に専門分化し、研修中の医師にとって内科ジェネラリストとしてどこまでを学ぶべきかの目標を見失うこともあり、また近年はevidence-based medicineの要素も重要で、情報に溺れて診療することにもなりかねない。その点、本書は最新の文

献に基づいており、受け持ち患者に当てはめ該当部位を参照したり、様々な患者に遭遇した際に備え、全頁を通読すれば良いロールモデルになると思われる。

私事であるが、筆者は研修医時代より診療で得られた診断や治療のポイントをメモにし、今ではこれが膨大な量となり毎日の診療に欠かせないものとなっている。臨床医は誰しもこだわりを持って診療しているものであり、指導医のコツを盗み、minimum requirementである本書に書き込みを加えて、マニュアル人間となることなく、読者それぞれのマニュアルを作成していくことをお勧めする。その積み重ねと繰り返しで、経験を確実にして豊かなものにすると思われる。

本書が多くのトレーニング中の医師の座右の書として広く活用され、読者の研修内容が充実することを願うものである。

● B6変型 頁396 図16 2000
定価(本体3,300円+税) 円400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)